

7



日本
国語
大辞典

たけ〜とひん

日本國語大辭典

第七卷

編集 日本大辭典刊行会
発行 小学館

日本国語大辞典〔縮刷版〕 第七卷

昭和五十年一月十日 日本国語大辞典 第十三卷発行◎
昭和五十年三月一日 日本国語大辞典 第十四卷発行◎
昭和五十五年十月二十日 同 縮刷版第一版第一刷発行◎

編集 日本大辞典刊行会
発行者 相賀徹夫
印刷者 小林清

発行所 株式会社 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋二丁目三十一
電話 製作(〇三)二三〇一五三三三
販売(〇三)二三〇一五七三九
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八一二〇〇

*造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁
などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan

0581-420007-3068

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、
法律で認められた場合を除き、著作権および出版者の権利侵害
となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

たけ〔大・長・名〕①物の高さ。人の身長。また、物の長さ。●書紀・天智一〇年三月〔北野本訓〕常陸国の中臣部若手、貢手。長〔タケ〕尺六寸。●伊勢物語二二「筒井つきの井筒にかけしるがたけ過ぎにけらしな妹見するまに」。●榮花一見はてぬ夢「たけ、狩衣の裾まで伸へ縮め給けるを」。●色葉字類抄「長タケ」。●徒然草一六六「藤の先は、ひうち羽の長に比べて切りて」。●太平記九六波羅政事「長〔タケ〕五尺計なる小男が是非無く飛入れば、水は甲を越えたりける」。②特に和服で、肩山から裾までの長さ。●人情本・春色梅見書一六六「一八駒」サア御ふせうでもちよと着てお見え。丈タケ。や行が間違えやしないか。③馬の節のつめから背までの高さの称。四尺約一・二尺以上、五尺約一・五尺以下を標準とする。また、単に背の高い意にも用いられる。●今昔一・二八三七「真鹿毛なる馬の法師髪にて、長五つ許なるが、足固くて年七八歳許也」。●謡曲・羅生門「丈なる馬にうち乗つて、舎人をも連れずただ一騎」。●読本・棟梁引張月・前・一四回「前面〔むかひ〕の山間より、長〔タケ〕なるあま馬に駈立られ、十四五人の男ども、息も物つきあへず進まれ」。④ある限り。ありたけ。全部。限り。ありたけ。くびったけ。などのもので、接尾語のようにも用いられる。●山家集中「ものおもふ心のたけぞしられぬるよなよな意ながめあかして」。●史記抄一六「酩酊列伝」吾が意の思たけをすきとせしものをと云たぞ。●歌舞伎・韓人漢文手管始唐人恨し。四「伝七殿と名の知れた上は、尋ねて行て恨みのたけを」。●学問のすゝめ「福沢諭吉一四・世話の字の義心のたけを尽して忠告することにて、是亦世話の義なり」。⑤壮大な風格。雄大な趣。●今鏡六志賀のみそぎ。おとどの御うた雄たけたかく。いやすしくそきこへ侍しか。●後鳥羽院御口伝、或ひはうるはしくたけある姿あり、或ひはやさしく艶なるあり。●近代秀歌「むしかつらゆき、哥の心たくみに、たけおよびがたく、ことばつゆき、がたおもしろきまをこみて、余情妖艶の蘇をよまず」。●風姿花伝三「又、生得の位とは、長タケ也。嵩〔かさ〕と申は、別の物也」。●ささきこと上「古人の句は歌の面影を見ゆる故に、しな、ゆううたけらうたう言はぬ心見え侍り」。⑥勢い。●今昔一・一〇一「國王、軍を以て支と云へども、軍の長〔たけ〕劣りたるに依て支がたし」。⑦目方の単位。●塩麴鈔九「物宛と云は、物量分事也。略、四分を為二両十二兩を為一長タケ」。⑧振袖をいう。盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕タケ〔長の義で、タカセ・高背の約名言通大言海〕。タケ長の義〔和訓栞〕。⑨タカキ〔高の義〕和句解・言葉の根しらべり鈴江源子。⑩長いことというから、タケ〔竹〕の音転〔和語私隠鈔〕。⑪タテ〔経の義〕〔言元梯〕。〔開園金〕タキ〔伊予・愛媛周遊〕倉之田・倉之田

〔開園金〕タキ〔伊予・愛媛周遊〕倉之田・倉之田
たけが 知れる 限度や程度がわかる底が知れる。
●浄瑠璃・花洛受法記一「ホホたけのしれたる法問なき」。●雑俳・柳多留五「みつだんに母のいはるはたけがし」。●歌太夫・浮世柳比翼種葉・頼当一二幕「たけの知れぬ、歌舞舞い親にだ」
たけ 高し ①背たけが高い。たけが長い。たきたか。し。●書紀・雄略四年二月〔熱田本訓〕天皇、葛城山に射獵〔かり〕したまふ。忽に長タケタカ葛城山を見る。●源氏・夕顔立ちまよふらむつつかた思ひやるに、あながちにたけたかき心地ぞする。●白氏文集・天永四年点三・道州の民保備多し。長〔タキタカ〕別調、タケタカ者も。は三尺余に過ぎず。●星屋・有島武郎「若丈な丈け高い南京下見の二階家に仕立てあげた」。②日本文学における歌学用語の一つ。精神的緊張に満ちており、高雅簡潔である。気高きものびのびとして、格調が高き壮大崇高である。中古平安時代の歌合うたあわせの批評などに用いられ、ひとつの美的理念にまで高められた以後、歌学の伝承とともに受け継がれ、しだいに他の芸能の中にも浸透した。●関白内大臣歌合〔保安二年〕「左歌たけたかし。かちと申へからん。毎月抄」俊頼は「吾妻問答」句の様に長高く有心うしにめり。●吾妻問答「句の様に長高く有心うしにめり」。●俳諧・去来抄・先師評・先師文に曰、「中の七字能くおかれたり。句け長高く、意味すくなからず」と也
〔開園金〕タキ
たけの 髪かみ 身長に余るほどの長い髪。豊かな髪。みだれ髪。今謝野品手白百合、たけの髪をとめ二人に月うす今宵しら運色まどはずや
たけ〔竹〕 ①イネ科タケ亜科植物のうち、大形の種〔かん〕を持つもの総称。高さ一メートル数十メートルに達するものもあるが、数か月で第一次生長を完了すると、それ以後は大きくならない。茎は木質化し、中空で節が多い。地下茎は横にはい、各節に地下茎か、または、根を生じる単軸型のものと、地下茎の上方から根と地下茎を同時につける連軸型の二型がある。前者は日本産のものに多い。まばらな葉になり、後者は熱帯に見られる密な株立ちとなる。地上茎は節からよく分枝する。葉は短柄を持ち先のとがった広線形または狭長楕円形。葉鞘〔筒状〕の間に明瞭な節がある。葉鞘は細長い筒状で小枝を巻く。花は黄緑色で穂穂状。通常一稔性で、開花まで二数年を要し。花後、一連の地下茎に連なる根はすべて枯死する。材は弾力性に富み割裂しやすい特性があり、建築・工芸・楽器など種々の用途に広く使われる。また、モウソウチクを始めとして、ほとんどの幼い芽は筍〔たけのこ〕として食用にされる。主とし

て熱帯・亜熱帯に生え、河川の護岸林や観賞用として栽植されることも多い。●古事記中・歌謡・機向まきむくの「日代ひしる」の宮は「略多気〔タケ〕の根の根なる宮」。●万葉一五八四「梅の花散らまじ惜しむが園の多気タケ」の林に鶯鳴くのを阿倍奥嶋か。●竹取野山「たけにりて竹をとりつて、万の事につかひけり」。●巻本和名抄一〇「竹 四声字宛云竹八脚六反多介ノ草也 一云非ノ草非ノ草」。●浮世草子・しゃべ一代男四二「竹タケ」のことが「鐘・鹿おどしの弓・山崩（おうご）ふり上げて」。②節をいう。女房詞。●御湯殿上日記・文明一〇年三月二日「むろまお殿よりたけはしめてある」。●大上・蔵御名の事「竹のこ。たけ。③竿。節・尺八など。④を使つた管楽器。弦楽器を糸というのに対する。竹管。●御加草子・御書子鳥渡「少しいとまをたび給へ。たけをならしめてきかせん」。●雑俳・川柳評方合・天明元、松三「竹の弟子入りくちくちくおしき」。④紋所の名。竹に雀。三つ竹輪違ひ。下の名前として小説などにしばしば使われた語。転じて、下女をいう俗語。●浮世草子・世間御算用一三三「たけは朝手まはしあしきとて無業そへける」。●浮世草子・好色床談義一「下女はたけの好色下女はしたいいふものは、略かごとにかわれども、大かた名は、ふじ、すき、たけ、これなるべし」。●萩江録・四世萩江露友作曲。作曲年代は不明。「松とおび梅」とともに三部作の祝賀曲。〔開園金〕生長が速いところからタケオフ〔長生の義〕。また、タカハエ〔高生の約か〕〔大言海〕。②タカカ〔菊池の転〕〔日本萩生〕日本声母伝内珠庵雜記・言元梯・菊池俗言考。③タケ〔長丈の義〕が高いところから〔古今要覧・和訓栞〕言葉の根しらべり鈴江源子・日本語源・賀茂百樹。長の義名言通。④タカタケ〔高生の反、またツラゴエの反〕名語也。⑤イタタキ〔高根の反、またツラゴエの反〕名語也。⑥タケは、竹の意、朝鮮語に、から、ケはキ（少）の義〔国語学通論・金沢三郎〕。〔開園金〕タケはキ（少）は国語学通論・金沢三郎。⑦タケはキ（少）は文明・伊予・愛媛周遊・倉之田・倉之田
たけ 編む門かど 竹の編戸〔あみど〕のある門。●夫木三三「道かへてたか世をわたる宿ならん竹あむ門のまへのはは橋・藤原光俊」
たけ 植う 竹を植える。●季・夏。●俳諧・発句題叢一・夏・中・竹植て今夜来て鳴く鳥もかな〔俗略〕
たけ 植う この日に竹を植えること。中国の俗信に、この日に竹を植えること必ず根付くと伝えられる。竹酔日〔ちくすけ〕にち。竹植日〔たけうえび〕。●季・夏。●俳諧・笈日記・降すとも竹植る日は義と笠。●俳諧・おらが春・こぞの夏、竹植る日は



ころ、うき節茂きうき世に生れたる娘」
たけに 油〔あぶら〕 ①（もともと滑りのよい）竹に油を塗れば、いつそうよく滑る意から。口が達者であるさまをたとえいう。べらべらとよくしゃべる。立板に油。●天理本言・磁石・竹に油にあぶるをぬるやうに云たほどにまことかと思ふ。●雑俳・二刀・弁舌は竹に油の仲人口。②（若竹に油を塗るとやつやつと美しいところから）若々しく色つやが美しいさまにたとえる。●若々しくたけに雀（すめ） ①（取り合わせのよいものとされる）ところから。図柄として、また、一対として格好なものにたとえる。●浄瑠璃・本朝二十四孝三「これこの竹もその本は、竹に雀と離れぬ中」。●随筆一話「言一四竹竹すすめは品よくぬる」とめて向きぬ我恋。②紋所の名。笹竹の丸の内に雀が向き合っている形を图案化したもの。上杉氏・長尾氏・伊達氏などに用いた。●浄瑠璃・本朝二十四孝一「竹に雀は景勝の鳥帽子の長尾末かけて」。③（2の紋を用いたところから）特に、仙台の伊達家をさしている。●浄瑠璃・竹我五人兄弟・紋見「たけにすすめはみちのくの、五十四ぐんのそうまん所だてといふよ」。●雑俳・柳多留拾遺巻七「いや場で竹にすすめは氣をいために 虎（とら） ①（取り合わせのよいものとされる）ところから。図柄として、また、一対として格好なものにたとえる。●雑俳・柳多留三「三つの地には餅屋も竹に虎」。●西洋中・藤原三・飯名垣書文一〇下「潮次郎北八と言やア牡丹に唐獅子竹〔タケ〕に虎（とら）桐に鳳凰松に鶴」。②たけの秋（あき） 陰曆三月をいう。この頃竹の葉が、筍〔たけのこ〕を育てるため一時枯れたように黄葉するところからいう。●季・春。●俳諧・花見二郎「あらし山の巻竹の秋柳負鳥をしられたら仁轉」。●虚子句集・高浜虎子「春あとりて竹の秋なり茶白山」
たけの 油（あぶら） 新しい竹を火の上に置き、両端から出る褐色の液を集めたもの。漢方で、清涼・止瀉・鎮咳・解熱剤として用いる。竹瀝（ちくりく）●雑俳・柳多留四八「やぶ医者は竹の油がくぐくい也」
たけの 甘乳（あまはだ） 「たけがみ竹紙」に同じ。●多識編三「竹茹。今按、多計乃阿末波木」。●書言字考・節用集六「竹茹 タケノアマハダ（本草）」。〔開園金〕
たけの 編戸（あみど） 細い竹を編んで作った戸。多く貧しい家のさまをいうのに用いる。竹の戸。●平家一「祇王たそかれ時も過れば、竹のあみ戸をとおふさぎ」。●玉葉・雜一・一八二九「時しらぬ竹のあみ戸の内までも世は春なれや鶯の鳴く藤

賀二一七七、白雪はふりかへくせどもちよまへ。拾遺雜記「一七七、白雪はふりかへくせどもちよまへ。拾遺雜記ののみどりははらざりけり」清原元輔）、堀河に竹首稚木の葉散りし毎にかはらねば幾世をふべき竹の緑ぞ肥後）、・続千載、雑体・七十六代々をきふれども色変へぬ、竹のみどりのす糸の世をふふ進）

たけの宿やど、竹簾などの中にある家。また、竹で建てた粗末な家見すばらしい家。・春夏秋冬、河原鴉栖梧の高浜渚青楓、信実（あき夏）や鵜飼くるる竹の宿松柳千鶴、・妻木松瀬青々新年、飾竹てみやびたり竹の宿

たけの節よ、竹の幹の節（ふし）と節との間。・新撰字鏡「筵、竹箇、竹乃手」。古今雑下九五九「木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしにわがふし身はなりぬべら也よみ人しらず」（國語文字傳を参る）

たけの夜床よ、竹で作った床に夜寝る。この床の末、新撰六帖「一雪ふして竹の夜の床の寒けきにゆるす衣の御代やきてまして藤原家良し」、妻木松瀬青々夏「寺に寝る竹の夜床や時鳥」

たけの篋綱よりつな、竹をよって作った綱。・夫木二二「うき橋に竹のよりつなうちはへてお舟ならぶるふしの川なみ（歳離）」

たけの割下駄（わりげた）、たげた竹下駄に同じ。・雑律、纂聚五形なる絵を習ひたる会津益富「嵐閣」うす雪かかる竹の割下駄史東邦）

たけ八月、はつかに木をき六月よりか。竹は八月、はつかに切るのが最もよいということ。・宝永落書「はは謂ふ竹は八月六月美濃が腹をば今がききりきき」。豊隆尽「三竹の八月樹六月法事、殊数は今が切時」。諺記「竹八月に木六月」

たけを割った、（竹を縦に割ると、まっすぐぐに割れるところから）人の性質がさっぱりして、わだかまりがないこと。気性に陰險さや曲がつたところがないことなり。・咄本「一休咄序、邪なる萌な竹を一つにわりたるがごとく御志なりしなり也。坊っちゃん夏目漱石七坊っちゃんは竹を割った様な気性だが、只肝癪が強過ぎて」

たけ「岳」名（だけと）高く大きな山。高山・古事記上、雲紫の日向の高千穂のくじふる多気タケに天降りしもの、万葉五・八七三万世に語り継がしもの多気タケに領巾（ひれ）振りけらし松浦佐用姫大伴旅かき。源氏若紫、ふじの山なれば、たけの山大日嵩山高也。・色葉字類抄、嵩タケ山大日嵩山高也。・名語記、四山のたかき峯をたけとなす。如何。たけは嵩也。・嶽也。・國語集注完二（日本地名科学辞典によれば、嶽といふ語根をもつ山峰は、類聚や崩土を大規模にもつ雄大な山を用いられ、小丘でこの部類に

属すのに御旅先の祀られたものが少なく、後の場合には矢張り、低山ではあるが傾斜が大きく、露の多い山である場合が多い」という。〔因隠〕山。山岳。〔だけ〕青森県三戸郡118。②北アルプスの山の称。たけ。飛騨山377。③上流山岳地方の部落の称。鹿児島県肝付郡高山山川。④上流山岳地方の部落の称。福島県南会津郡伊北・長野県上伊那郡06。伊勢神宮の辺(朝熊岳の称)。鹿児島県肝付郡百引(高隈山)016。たけ島取県八頭郡西郷016。⑤タカネ高嶺(約2万)タカネの名。日本語原音・林葉大言海。⑥タカネの転日本釈名・言元梯和訓葉。タケ(高)の義(東雅・注和名抄)。⑦タカコエ(高越)の反名語記。⑧山水のある所の名前。タケ(出処)の義(和句解)。〔因隠〕會史中世近前期では「たけ」の義。⑨志平安。⑩江戸。⑪金之。〔因隠〕金。名。和玉文明記。日本神皇正統記。東本。易林。書。たけ・茸・菌・名。①たけのこと。〔季・秋〕・書紀上皇極三年三月(當時の平安中期末訓「便ち紫の菌(タケ)雪より挺(ゆ)けて生ひたり。二十卷本和名抄一六六茸。崔烏錫食経云菌耳而入容反上項菰反上食之重爾雅注云菌有木菌土菌石菌」)和名皆多。八・九知らぬ茸と思すべらに、独り迷ひ給ふ也けり。たけ名記四くさひらを松たけ、ひらたけといへる。たけの名、如何。茸とかけり。女中詞元祿五年)たけとはきこ。俳諧・改正月令博物考八月「茸菌タケきの二茸(タケ)菌(くさびら)かくの如き名を分ちてゐる」も皆茸(タケ)類の物名にて②獸肉をいう。獸の肉を直接にいうのを避けて用いた語。皇太神宮儀式帳「種々の事忌定給ひ。略(完)し」を多氣(タケ)と云ふ。万意きのこ。福井県83。三重県志摩郡633。京都府64。兵庫県62。鳥取県70。鳥根県718。岡山県真庭郡730。広島県749。香川県54。島根県78。岡山県真庭郡730。岡山県1形が似てゐるところからタケリ(牡陰)の略名言通・大言海。③タケキ(延義和訓葉)。④笠のようにたけたところから、タケ(長)たるの義(地字造語抄)。⑤タケ(佗化)の義(言元梯)。⑥タカコケ(高苔)の反名語記。〔因隠〕會史中世近前期では「たけ」の義。⑦馬鹿をいう。盗人仲間の隠語。〔特殊語百科辞典〕

たけ(タケ) 因隠 蚕の第二眠。上野106。群馬県多野郡240。埼玉県秩父242。山梨県甲府近在039。

たけ(他) 他(タケ) 他人を教へ導くこと。化他。

たけ(他家) 他家。また、自分の親族でない家。ほかの家筋。富家語。他人人見習此説如此拝する尤身苦を。太平記3。笠置軍節門。他家。宗徒の人々迄を催さる。文・明本節用。他家。タケ。詩経伝風・葛生(葛生蒙楚。藋藋于野)。

たけ 梶尾林書言

「げの付いでできたもの」・動詞の連用形に付いて、形容動詞の語尾をつくる。「したそな様子。出て行きたげにしている」「早く帰りたいような様子」など。

だけ 《名》①絶壁。がけ。兵庫県美薗郡645
呂久部740 山口県柳井71 徳島県阿波郡804 香川県小豆島82 愛媛県松大分県大分郡929 岩谷の崩し。がけ。高知県土佐郡山田86の崩し。がけ。高知県土佐郡山田86の崩し。がけ。

だけ 《一》副助。体言または活用語の連体形を受ける。
①(たけとも)程度・限度を表わす。：ほとと。
：限。『浄瑠璃大師拾遺歌』中山の奥にも身をかくし、のがるだけはけはせせず京近辺をうろたへへ。『落柿草子』青楼日記『優男之私誼』そういふおめが心なをれもせいにつづくたけどふねれこうなうれ来通さかき。『読売新聞明治三四年一月三日日及ぶべき大々(タケ)の方法を画せん』それから夏目漱石一五其住打は父の人格を反射する丈(タケ)夫それ大々多く代助の不愉快にした。『兵卒の銃聲』田山花袋一九〇或は残酷だだけそれだけ忘れなかつたかも知れなかつた。②(うらち、特に)それ相応に、にふさわしく、③(うらち)程度の、の意を表わす。↓だけに。『滑稽本東海道参襲栗木四下』上は無田舎だ、ものをながら自由だ。『滑稽本七偏人』初上、無だな孔方をながうって置やしただけ、略まんざら野夫がられもしねへ〜なりで、伯父の記徳富蘆花二二『鉛江は僕と同年限り、意味表わす。『難非往吉みや下駄敷』それと玉だけで扇木にのる。『浄瑠璃平仮名盛寶記三』我子を我が育てるには、少々怪家さても不調法にだけ夫たないで済めども。浪花聞書「たけこれだ有ても、親だからとて、多岐間書」たけこれだ色雪の梅一二七回「しかし吾等達に隠すだけが、素人のやうで憎らしいのう。』多情多恨尾崎紅葉二二口頭くちに出したのは纔に如此(これ)ウ(タケ)であるが、福辻源郎は「山家集中」の中のおもふ心のためぞしらぬるよな月をながめあかししてのよいうな名詞(たけ)と考えられる。『関園全集』タキ「愚根伊予」豊後ダキー(豊後)たけい《他形名》鉱物が固有の結晶形を示さず、周囲の他の鉱物の形に支配された、偶然的な形を示す現象。『関園タケ』他のはかりごと。玉葉寿永二二「たいけい【他計】『名』他のはかりごと。玉葉寿永二二年六月六日「百万事不可叶、只天下落居之時、可施「德化」之由、法皇起、自歎慮、可被立御願也。」此外他計一切不可叶者」。李韓対憲宗論開党文「明主顧遇則退、疑阻則退、不為他計苟安其性。『関園タケ』金之〇

たけい^(一)多形「名」同一の化学組成をもつ物質で、結晶構造が互いに異なるものをいう。同質多像。多像。同質異像。(英)タケイン 愈之①

たけい^(二)たけ(武井・竹井) 姓氏の一つ。(英)タケイ 愈之②

たけい^(三)たけ校(京師美術学校) 童画教室。長野出身。東京美術学校卒業後、京師美術学校を置き続け、児童出版美術の興隆に尽くす。童画集「武井武雄童画集」、廢園の草」のほか、「武井豆本」七十余点。「戦中氣儘畫帳」など。明治二七年(一九〇四)生。

たけい^(四)[猛]「形動」文語の形容詞「たけし猛」の口語形で、室町時代頃用いられたもの。「たけし猛」に同じ。・日葡辞書「*maga* タケイ」訳「勇敢で立派な勇士」。または擲石「どうもう」なライオンなどのように強くて勇敢である。」

たけい^(五)[多云]「形動」多くの種類の学問・芸能。または、多くの学問・芸能に通じていること。また、そのさま。・文明本節用集「多云タゲイ」・日葡辞書「*multo* (タゲイ) ヒト」・春ਣ久保田万太郎三羽鳥六十六・菱川は多云たて」・書籍「金鑛」元元係不若且多云た云」(英)タケイ 愈之③ 愈之④ 愈之⑤

⑥ [同義連綿]

たけい^(六)は無雲むげい」多云であることは、ひとつの芸に深く通じることができにくく、結局無芸なみに等しいということ。

たけい^(七)か：タツク多彩花」一名「同一種の花で、個体間または個体内で安定した二種以上の形態を示すものの。キタ、アジサイなどの花に見られる。(英)タケカ 愈之⑥

たけい^(八)力 愈之⑦

たけい^(九)「(武石) 姓氏の一つ。(英)タケイ 愈之⑧

たけい^(十)えび たけま 「竹植日」「名」「たけ竹植うらたけい」姓氏の一つ。(英)タケイ 愈之⑨

たけうち 「竹内武内」 姓氏の一つ。(英)タケウチ 愈之⑩

たけうちきうち 「竹内久一」彫刻家。江戸の人。初め牙彫(ういちゅう)を学ぶ。のち木彫に転じ、奈良の古代彫刻を模倣し、明治期の木彫の基礎を築いた。代表作「薬師寺聖観音像」、「興福寺無著世親像」の模刻「伎芸天五年」。帝室技芸員。東京美術学校教授。安政四〜大正五年(一一八五・一九一六)たけうちげんどう「竹内玄同」江戸末期の蘭方医。加賀国(石川縣)の人。本名幹号は西坡。玄同は字(あざな)。叔父玄秀の養子。シボルトラに医学を学び、將軍家定家の侍医となった。文化二(明治三年)一八〇五(七八)没。

たけうちせいほう（竹内鶴庵）日本画家。京都出身。本名恒吉。初期横版と号した。ヨーロッパ遊学後、従来学んでいた四条流に西洋画法を取り入れ、軽妙で洗練された独自の画面で、京都日本画壇を代表した。帝室技芸員。第一回文化勲章受章。代表作「雨窓」あれだ立に「鯛さば」。元治元年（一七九一）（八六四）一九四二

たけうづぎ（竹空木）①因樹樹木。②うづぎ空木。三重県岡山県。③たけうづぎ（箱根空木）。三重県員弁郡。④たけうづぎ（谷空木）。三重県三重郡。⑤

たけうま（竹馬）①竹で作り、馬になぞらえて子どもなどが乗って遊ぶもの。古くは、葉のついた笹竹を適当な長さに切りとって、その元の方に、手綱のようにひもをつけて馬に見たてて、またがり、ひきずって走らせた。適切な長さの竹の竿に、手綱をつけた木製の馬の頭を模したものを、末端には、小さな車二つをつけて、またがって遊ぶものなどがあり、江戸時代後期から二本の竹竿の適当な位置に、それぞれ足がかりをつけて、その上に乗る。両手で竿の上端を握って、体の平衡をとって歩くのが見られるようになった。たかあし。ちくば。《季・冬》・聞書集「たけむすを枝に今日はたのむかなわらは遊びを思ひ出でつ」・虎寛本狂言「千鳥」是を斯う竹馬に致しまするほどに、急で馬場先の人を払せられい。・浮世草子「好色一代女」・此四十年跡迄は、女子十八九まで竹馬（タケウマ）に乗りて。・花水自野草堂「竹馬や落馬將軍伝太郎」②江戸時代、日守草堂に竹を四本組み合わせたものを二つ、棒の両端に天秤（てんぺん）のようにぶら下げて、中に品物を入れて運ぶのに用いたもの。大名行列の後尾につきしたがったり、行商人が用いたりした。・滑稽本「東海道中膝栗毛」三上「侍供が十二人やりもち、はさみ箱、ぞうり取り、いかに、かっぱ、竹馬タケウマ、つうがう上下拾人あまじや」③たけうまふるぎや（竹馬古着屋）の略。・雑俳「柳多留六」竹馬と下女わけの有るていたらく。・滑稽本「浮世風呂」二下「そして、はめへの所と」へ来る竹馬



竹馬 ②（絵本風俗往來） 竹馬 ①（右より 法然上人絵伝 西鶴諸国はなし 守貞漫稿）

（タケウマ）が通るなら呼んで呉んな（園田タケウマ）タカウマ・タケウマ（信州風物）タガマタガン（若手）タケウマ・タケウマ（千葉）（園田タケウマ）（園田）

たけうまの耳（みみ）に北風（きたかぜ）（竹馬に耳があるとして、それに北風が吹いても、少しも感じないの意から）なを聞きとるも全然通じないこと、他人の忠言を少しも聞き入れないことなどのたとえにいう。馬の耳に念仏。馬耳東風。談義本「当世下世話義五郎路無字大夫江の島参詣の事」竹馬の耳に北風とても聞入るべしとおもはねば

たけうま（竹馬）江戸時代、呉服類の行商をしていた竹馬古着屋が、享保年間（一七一六—一七六六）幕府の許可を得て江戸市本町・本銀町の河岸通りに設置した店（たけうま）とみせ。たけうま（竹馬）江戸時代、竹馬古着屋。②に、古着や小ぎれ、古ざねなどをに入れて行商してまわった商人。竹馬。・随筆「守貞漫稿」五「竹馬古着屋竹具の四足なるを担ふ故に竹馬と云、古衣服及び古衣を解けて吟或は裡其他諸用の古物を売る、専ら小戸を巡る也」

たけうり（竹売）竹竿を行商して歩くこと。また、その行商人。・三十二番歌人歌合「八番竹売うかぬるしねんこ竹の末の露もとの半のまうけだになし」（園田）

たけえびら（竹簾）「たかえびら（竹簾）に同じ。・曾我物語「大見八幡が伊藤をねらひし事、柿の直垂に、鹿矢さけたるたけえびら取りてつけ」ダゲル（Louis-Jacques Mande Daguerre）リイシャ（リイシャ）フランスの発明家。近代写真術の祖。化学者ニエプスと協力して、銀板写真法を研究。ニエプスの死後、一八三八年、最初の実用的写真法ダゲレオタイプを完成した（一七八七—一八五〇）

たけえん（竹簾）竹材を並べて張って作った腰かけ台。竹製の縁側縁台。・浮世草子「好色一代女」二二「ある夕暮に風梢をらし、ばせを葉れ、物すごき竹縁タケエンに世の移り替を覗いて、浄瑠璃浦島年代記三切合打合ふ太刀おと、竹縁板あんぐはたりひつしや」（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけお（たけを武雄）佐賀県西部の地名。武雄温泉を中心に発展。佐世保線が通じる。昭和二年（一九五〇）市制。（園田）

たけしはてら【竹芝寺・竹柴寺】東京都港区三田にある寺院。濟海寺はその跡に建てられたといわれる。

車級日記【この家を内裏のことくつくりて住ませ奉りたけしはてらといふ也】

たけしはてら【竹芝浦・竹柴浦】東京都港区芝浦の海浜の古称。

たけし【竹柴】「竹」を並べたような縦の皺のついた織物。・細雪谷崎潤一郎「下四」たけしほの地を透かして

たけしま【竹島】島根県隠岐諸島北西方の沖合にある島。男島・女島と付近の岩礁から成る。付近の海域はアジ・サバ・ワカメの好漁場。明治三十八年（一九〇五）日本領土を宣言。リアンクル礁。

たけしま【多景島】滋賀県彦根市、琵琶湖にある島。日蓮宗の見塔がある。・浮世草子「武家義理物語」三五「世ぶねのたりに身を越へて」竹生嶋の北なる竹嶋（タケシマ）といふ所に

たけしま【竹島武島】（たけしまとも）姓氏の一つ。

たけしまゆり【竹島百合】ユリ科の多年草。朝鮮半島の東方にある鬱陵島（ウルルン）島原産で、観賞用に栽培される。高さは一・一五メートル。鱗茎は卵形または球形で鱗片は三角形に近い。葉は長さ一〇・一二センチの披針形で六・七葉ずつ二・三層に輪生し、茎の上部では小型の葉が生ずる。初夏、茎の先端の総状花序に五・一五花をやや下向きにつける。花は橙黄色で内面に暗紅色の斑点があり、径約六センチ。花被片はやや多肉質で、先端は巻かない。おおくまきゆり。和名は鬱陵島の古名竹島に由来。・物品名拾遺「タケシマユリでうせんからさゆりの類」・日本植物名鑑（松村任三）「タケシマユリ」

たけしまらん【竹欄】「名」ユリ科の多年草。本州中部および北部の亜高山帯の針葉樹林下に生える。茎は高さ約三センチのY字。葉は卵状披針形で長さ約三センチ。二列に着き、三脈があつて、縁は滑らかで突起がない。初夏、葉腋よりえきから長い柄のある小さな赤褐色の花が垂れ下がつて咲く。果実は液果で盛夏に赤く熟す。・日本植物名鑑（松村任三）「タケシマラン」

たけしやぎょう【シヤギョウ】「竹修竹」は尺八のこと。虚無僧が尺八を吹いて托鉢（たくはつ）してまわる仏道修行。・歌舞伎・独道中五十三駅「三幕「竹修竹（シヤギョウ）のこの身に、天蓋取は至つて不義」

たけしやばん【竹襦袢】「名」（シヤバンは襦袢）

汗が衣服にしみるのを防ぐために、綿・苧の類を短く切つて中に糸を通し、菱形などに編んで作った肌襦袢。・季夏・俳諧「虚栗上」汗に朽ば風すくべし竹襦袢（風箏）

たけし【夏】「シヤウ」色床【名】竹で作った腰掛。・季夏・俳諧「続五色床」霞霞よしず洩る風に組（たす）の竹床机（たけしやウギ）参本・螢の華の咲とおもへば（霞霞）・諸道具寄合はなし「竹しやうきが言うてある、尻つめるのも出来心」

たけしんじや【多家神社】広島県安芸郡府中町にある神社。旧県社。祭神は神武天皇ほか。天皇の東征の際の行宮の跡地に創祀されたと伝えられる。安芸国の三宮。

たけす【竹簀】「たけすのこ（竹簀子）」に同じ。・書言字考節用集「七・簀・タケス」

たけすいば【名】「園圃植物」いたどり（虎杖）。福井県大野郡830 島根県美濃郡益田774 山口県阿武郡蒲原郡たけすがき【竹簀】「名」細竹で編んだ簀子を床（ゆか）にしたもの。たけすがき。・六条院宣旨集「しづのやにたねすのよはたけすがきひまやう風にめをさますかな」・新撰六帖「冬来てはあねこがねやのたけすがきよきまの風か寒けき藤原知家」・浄瑠璃「生玉心中下」ちぎりが寒の世々迄もかかぬ床の竹すがき」

たけすがた【太婆】「名」①身のたけとからだ。身長と風采（ふうさい）。・源氏物語「童随身を給はし給ける」ゆたさ。②歌などの格調と風采。・意領和向自歌合歌のたけすがた、ことにみえ侍り、勝と申くや侍らむ」

たけすかんぼ【名】「園圃植物」いたどり（虎杖）。福井県石川郡879（たけす）かんぼう群馬県山田郡240（たけす）かんぼ島根県馬場馬場

たけすく【長過】「園圃植物」園圃上（二）円熟しきる。よく熟達する。・評判記「園圃大鏡」二「たけすくは仕込に、約束し、初めあふき日、俄に隙入（ひま）いり」よしにてゆかきるもおもしろ」

たけすし【竹厨子】「名」竹を主要材料として作った厨子。特に東京国立博物館が保管する、国宝の行信大僧都が法隆寺に献納した一基は名高い。

たけすだれ【竹簀】「名」細い竹または細く割った竹を編んで作ったすだれ。湘簾（しやうれん）。たかすだれ。・季夏・浮世草子「好色一代女六」一「世間見せに式枚障子を入れて、竹簾（たけすだれ）に中古の鉄鉚（てつばね）（いさら）の目貫」・雑俳「川柳評方句合」宝暦一「智三竹すだれ外題の無いは生きて見へ」・雁（森鷗外）二「暑い時は竹簾（タケスダレ）が却して

ある」

たけすのあいしかた【あひかた】「竹果合方」【名】歌舞伎の下座音楽の一つ。・「竹に果を食う篤の」という唄を入れるかんから太鼓（小型の太鼓で音が低い）を竹桴で打つ囃子に合わせ、二上りの三味線の合方のこと。かんから太鼓は昔の見世物に使った楽器なので、芝居でも見世物小屋や盛り場の場面に使う。

たけすのこ【竹簀子】「名」（たけすのことも）①細い竹を細く割った竹を編んで作ったしきもの。②竹を網代（あじ）のようにつまんだもの。・出観集「賤の男がくる木のこや竹すのこいなほみだれたかか頃哉」・滑稽本「東海道中膝栗毛」二「下」天井はたけすのこにて、そのうへにむしうをしきたつて作つた縁側、または、床（ゆか）竹縁（たけえん）。・親元日記寛正六年六月六日「為公方盛賞記四」大竹事（多武事）可被導進」・浄瑠璃「平假名盛賞記四」大竹（タケ）すのこを踏と進」・浄瑠璃「平假名盛賞記四」大竹（タケ）すのこを踏と進」・草鞋の紐を解（とき）き（あし）」・読本「椿説弓張月」六〇回「竹簀子（タケス）こに尻をかけて、草鞋の紐を解（とき）き（あし）」

たけせい【竹簀】「名」竹を材料として作ること。また、そのもの。・桐の花「北原白秋」秋の思「竹製の、大小さまざまな鳥籠」

たけせり【留竹】「留竹」セリ科の多年草。各地の山地の木の下に見える。高さ三〇・一六〇センチ。全株にまばらに短毛を生ずる。葉は柄がやうして互生し、二回三回複葉。各小葉は長楕円形で先端はとがり、縁に不整な鋸歯（きりぎりす）がある。秋、茎頂に白色小花をかさ状に密集してつける。果実は長さ四・五ミリ、扁平の長楕円球形。かつめさう。・日本植物名鑑（松村任三）「タケセリ」カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけせうし【タケセリ】カノメサウ

たけた【竹田】大分県西部の地名。江戸時代は中川氏七万石の城下町。阿蘇九重・祖母などの山々に囲まれた竹田盆地にあり、農業を主とする。・南西家田能村竹田のむら曲の想を得た岡城址などがある。昭和二年（一九五四）市制。岡城址

たけた【竹田】（〇）京都市伏見区の地名。鳥羽天皇の離宮があつた所で、鳥羽・白河・近衛天皇陵がある。・続古今・夏・二二六・今朝だにも夜をこめてた片河やたけたのさなへふし立にけりへよみ人しらず」・松井本太平記「三・無創御即位事」城南離宮の鳥羽御所竹田に近き伏見院十楽院」・浮世草子「好色一代男八・一内裏様の国なればこそ、略有難くかたじけなく、略見れたす竹田（タケタ）の葉末（はず）に夜あらしの通ひ」

たけた【竹田】（〇）大和国（奈良県）磯城郡の地名。現在の樺原市東竹田町から磯城郡田原町西竹田にかけての一带にあたる。万葉「四・七六」うち渡す竹田たけの原に鳴く鶴たけの間の無時無し吾あが恋ふらくは父伴坂上郎女」

たけた【竹田】（〇）「たけた（竹田）の芝居（しばい）」に同じ。・浮世草子「武家義理物語」二二「又大夫が舞を聞入、竹田（タケタ）がからくりの見物。洒落本・松谷妓話」二「竹田のからくりじやあるめしひつくりけへつてむかふづから面白くねへ」

たけたの座【名】「たけた（竹田）の芝居（しばい）」に同じ。

たけたの芝居【しばい】江戸時代、大坂道頓堀、太左衛門橋南詰東入浜側に創設されたからくり人形芝居。寛文二年（一六六二）竹田近江が開場したもので、からくり専門の芝居としてはわが国最古のもの。人形、屋台、道具の類が、機械仕掛けで動くようにした見世物。のち類焼で移転し、小芝居の歌舞伎となったが、劇場は明治九年（一八七六）まで存続した。竹田の座。竹田のからくり

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

たけた【竹田武田】姓氏の一つ。園圃植物

ただけだ、かつより」〔武田勝頼〕「戦国時代の武將、武田信玄の第三子。幼名伊奈四郎。父の死後甲斐に引きつる領国を継ぎ、美濃・三河・遠江と進出したが、長篠の戦いに敗れ、以後信長、家康の勢力におさへられ、ついに信長に攻められて、天目山のふもとで自刃した。天文一五・一五正一一年（一五四六・一五五七）藩主、名は正生まさお。藩主徳川齊昭の幕遣通称戸藩、叙任して伊賀守。藩主（あき）は伯道解除運動、戊午の藩難に活動して免職。万延元年（一八六〇）再び登用されて藩執政。元治元年（一八六九）藤田小四郎（東湖の子）の筑波山元兵を助けて天狗党の首領となり、同志八〇〇人を率いて西上、両毛・木曾路を経て京都の一橋慶喜に直訴しようとしたが、途中、大垣藩にはばかぬ、加賀藩に降り、越前教員で斬首された。享和三・一慶応元年（一八〇三・一八六五）

桐木地に四本の竹の柱をつけたもの。・和漢菜誌一
「古事類苑」遊戯九「竹白子」〔笑園繪之夕〕
「たけ」類題「竹松明」〔笑園繪之夕〕 適当な長さに切った竹
に火をつけて、あかりとしたもの。・俳諧・毛吹草五
「飛簾竹松明 タイマツ」のひかり哉〔かな〕「望」〔一〕
〔笑園繪之夕〕
「たけたかたんし」〔丈高檀紙〕「名」〔おおたかたんし〕
「丈高檀紙」に同じ。・類聚名考・調度部八「文房
」たけ高檀紙の上下のたけ高く長さ放い〔ふな〕
たけ高だんしともいへり〔笑園繪之夕〕
たけたかゆび〔丈高指〕「名」手の五本指の中央の指
なかゆび。たかたかゆび。・史記抄「一子第六六
」「指指は中のたけたか指ぞ」日葡辞書「aguetayau
」(タケタカユビ)・咄本「醒睡笑」七目を三つはし
い略「一子」は手のたけたか指の先につか、能の時ま
たは風流何にて見物のか人のせいたけにかなの時ま
ず、手をさし上げて見たい〔一〕 〔因〕富山県東礪波郡鹿

今略・四竹田頭、本名大坂町屋、又、かめや頭と云
一浪、竹田の戯曲にて用ゆとあるは、歌舞伎・故に竹田
非ず、淨瑠璃のあやつり芝居に用ひし物也。爰に竹田
の名あり。〔立目・留名・凶〕

たけたち〔立目・留名〕立つたときの体の高さ、身の亭
さの程度、身長。せい。大和・一七三・薄色
の衣・濃き衣へにきて、たけたちといよきほどなる
人の、源氏「若菜土舞人は、あふのすけども」給
たち・清ねに「たけたちとしきさきりをえらせ給
・堤中納言・虫づる姫君」たけたちよきほどに、髪ま
桂うちさばかりにて、いと多かり

たけたてわき〔竹立・通〕「たけたてわけ」竹立
通に同じ。〔立目・留名・凶〕

たけたてわけ〔竹立・通〕模様の名。立通たてわき
きの中に竹の葉などを配したものを。たけたてわき
・増鏡・一・さしう・綾の織・生絹・すずし・の御袴
御紋竹たわけを織る。〔立目・留名・凶〕

なれば車輪。〔南園倫之ヲ〕
たけたばみち。〔南園倫之ヲ〕 竹束の櫓でかこつて、矢や銃丸を防ぐべくよるに、敵に攻め入る通路。〔南園倫之ヲ〕
たけたひし。〔武田菱〕①紋所の名。菱形を四つ、菱形に組み合わせたもの。甲斐・山梨県石の武田氏の家紋であつたところからいう。また、それを配した繁文しげなもの。辛妻さねいびし。連歩色葉〔武田菱 タケケビシ〕・申陽軍簀呂品三〔武田菱 タケケビシ〕を大きに時絵まきおしたる箱の。雑俎・柳多留〔二〕から出て来た床着の武田菱。黒潮御徳富鷹化〔一・二〕武田菱(タケケビシ)の五紋の浅黄羽織。〔二〕模様うち①を幾何学的に排列したものをたけたひし。〔西園書堂〕
たけだひひうし。〔古曲書〕「竹田拍子」〔名〕歌舞伎の下座音楽の一つ。竹田のからくり人形芝居で使われていた鳴物を歌謡化で借用したもの。太鼓・大太鼓

たけだしんげん（武田信玄）戦国時代の武将甲斐
国守護左衛門大將信玄の子。幼名太郎。名は晴信。
法名信玄、別号・德業軒。法性院と稱す。諏訪小
等原・村上その他の豪族を倒して信濃一円を制し、
六越国境で上杉謙信と対立した。永祿四年（一五
六二）の川中島の戦いは有名。その後、飛騨・北
東・駿河に進出し、大領国を形成。元龜三年（一五
七二）西上の軍をおこし三河野田城まで進出した
が、陣中で病歿。「信玄家法（甲州法度）」の制定、信
玄屍名で知られる治水事業など、領国経営にす
ぎぬた手腕を示した。大永元（正徳元年）（一五二一
—一五二二）

たけだ たけし (たき身分相応。分相応。佐岐弘 熊本
植松 出雲守) (同じ身分が、一躍大名 奥平昌高の力)
たけたけ [名] (たきた身分相応。分相応。佐岐弘 熊本
県南関野 宮崎県東諸県郡966 鹿児島県下都賀郡
たけたけししい (猛猛)形口図(たけたけだし「影シテクダツキ」
①気性行動などか、たいそういさましく強い。
じょうに勇猛である。気性・行動などが荒々しく激し
い。●太平記一二佐々木信胤成宮万事は元来田
舎人也ければ、物妬(ものねらみ)はしたなく心武々
数タケタケシク也。②悪事をすることに對する
反省心などもあわせないで平氣である。うすうす
いふ。しどとい。ずばとい。俳諧・玉海集一・春歌
(やぶぎきは華ぬす人やたけたけし重晴)・歌舞

たけだに（「竹倉」姓氏の一つ）
たけだにんぎょう（「保道權」之）
たけだにんぎょう（「竹田人形」）
芝居に用いた、からくり仕掛けで動く人形。また、そのかたちを模した人形。・雑俳・磯の波」しのび路は「竹田人形の足づくか」と、歌舞伎・月梅重麗花・花井お梅・五藤拾つてくれた思恩を思て、琴の調子の狂ふもの、胡弓のすなはに、杯吞さ、少しは酔つたかふらふと竹田人形（タケダニンギョウ）見たやうだ（「南園タケダニンギョウ」繪之）
ただののみや（「田宮」）
九〇六に北白川宮能久親王の第一王子恒久王が創立。昭和三年（一九四七）に皇族の身分を離れて、

竹笛(ヤッパ・シンバル)を使う。長閑操三番曳の「採(もみ)の段」などで用いる。〔楽曲タケタビ〕

ーシ(音)ー

たけたらず「丈不足」(名) 衣服などが、身長にくらべて短いこと。・化銀舎(泉鏡花五・五三)の桐の縫着紋で少し不足(タケタラズ)といふのを見て。〔楽曲〕

たけたりゅう(リウ) 武田流(タケナガ) ①江戸初期の軍学の派。小幡朝衡(ハシラキ)が、甲斐の武田信玄、その将山本晴幸らの兵法を伝えたもので、將軍家・指南の兵法でた。甲州流。信玄流。大和事流。②武田の流(タケタリウ) 軍術。・駿河土産十三、御家御軍法万流(タケタリウ) 軍術。〔駿河土産十三、御家御軍法万流(タケタリウ) 軍術。〕

たけだ ゆうきち 【武田祐吉】 国文学者。文壇。東京出身。国学院大学卒業。国学院大学教授。上代文学を専攻。文献学的方法に基づき、『万葉集』などの校訂、考証に努めた。著『上代国文学の研究』など。明治一九・昭和三年（一八六〇・一九五〇）
 ただだりんたろー 【武田麟太郎】 小説家。大阪出身。昭和初期小説『暴力』を發表し、プロレタリア作家としての地位を築いた。西鶴に傾倒し、のち市井に題材をとった作品を次々と發表。「人民文芸」を、おこし主宰。著『日本三文文才発表』（銀座八）など。明治三七・昭和二年（一九〇四・一九四一）
 下げた 【田下駄】 名 農耕具の一つ。深田での作業

伎・東海道四谷怪談四幕「幽霊たけだけしい」とは
なたる事だ」
因 たけだけし 〇(名) 〇(形) 〇(動) 〇(名)
たけだけしげ 〇(猛) 〇(形動) 〇(形容詞) たけだけしいの
語幹に接尾語「げ」の付いたもの。気性、行動など
がただけしいさま。
たけだけし 〇(猛) 〇(名) 〇(形容詞) たけだけしいの
語幹に接尾語「し」の付いたもの。気性・行動などが
ただけしいこと。また、その度合。
たけだし 〇(発出) 〇(名) タバコの吸殻を、着物や袖にと投
げ込み、騒ぎ出すすきに乘じて持物を盗みとるこ
つていう、すり仲間の隠語。特殊語百科辞典。

宮号を施した。^{〔関公備忘〕}①
たけは「竹束」名。竹の幹を切りそろえてたばねたもの。伊豆の踊子「先端成五踊子は竹束の」ところまで引き返すと、また走って来た」②近世の軍用用ひの一種。丸竹をたばねて櫓とし、矢や銃丸を防ぐのに用いる。牛竹束、車竹束、植竹束などの種類がある。・辛若・三木・二陳には石俵竹手把てのほう櫓をかざしつけ、堀ぎわのうききたり」・三河物語（一十九代元康）
「竹たばを付而、昼夜、時之間



竹束②〔兵器図説〕

事之議を自ら以ては武田田に被遊候間」・難辨百箇語流より目に智慧の武田流」(2)・水泳術の一流派。何井流・御園生長右衛門持興の門人、毛利藩士武田要平泰信が文政年間(一八一八—三〇)に創始したものと。〔園田タケダリ〕園田 〔竹〕竹

たけだるき〔竹垂木竹盛〕竹 竹を使って屋根のたきをしたものと。たきだるき。太平記四、備後三郎高德事、昔の玉楼金殿に引替て、憂館(うきふし)茂(しげ)き竹盛タルキ、涙涙なき松の増(か)ふ。日ひ

〔竹田〕〔竹田〕 〔名〕江戶時代、宝永年間(一七〇四—一七)但馬国(兵庫県)朝来郡竹田から産出し

たぐひたぐひに「竹台子」(名) 茶道で用いる台子の一種。
千葉県宮生遺跡などの水田跡から出土。**〔発出タゲ〕**

時、脚部の埋没を防ぐため使用した大型の下駄。古代のものには田舟(たぶね)ととも彌生古墳時代の頃に使用され、静岡県登呂遺跡、


田下駄(たげだ) 農具便利論

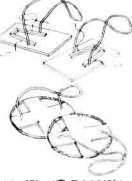
たけだすきん^①・ツギキ^②「竹田頭巾」^③「名」頭からすっぽりかぶり、目だけ出した黒くりめんの頭巾。江戸中期、竹田のからくりで人形置が用いた。鶴屋頭巾・洒落本・当世風俗通・之令子風^④頭巾・黒くり緋大坂頭巾。これを世俗、たけ田頭巾とも「龜屋頭巾ともいふ」^⑤。随筆・守貞漫稿



頭巾^⑥ 頭巾^⑦
 当世風俗通^⑧

もゆたか無、（御原筆鑑）品三
二「竹計りに」も限らず、杭柱までからげ集め、武田
の諸勢足を竹たばねと名付、（浄瑠璃用）明天皇職人
鑑五「前に大木ありて付て乱杭けたばすきまもな
く、所に井根堀を付て横矢しげくぞ構えける」
（関白筆鑑）
（同）國語書
たけたばうし「竹束三」家の棟木の形に作った
ものに竹束を寄せた名、陣用の櫓、牛車、
たけたばふね「竹束船」竹束の櫓を周脚にたて

たけち〔高市〕〔たかいちの意〕土地の隆起した高い場所にある市。古事記下「歌謡（うた）の高（たか）ま」とこの名久知タケチに小高る市の優（まさ）にかさ。〔奈良県大和国〕北西部、高市たけち。〔部の古称〕。奈良（四八四）左注「右今案高市岡本宮後岡本宮二代各有異焉。今皆一」。三



田下駄〈農具便利論〉



© 2004 Blackwell Publishing Ltd, *Journal of Internal Medicine* 255: 103–110

②「たけながしきん(竹流金)」の略。俳諧・風簾波一「水こぼる箕(かけい)や銀の竹ながし(二葉子)」。
 おおく物語「金にてもあらば出せよといふにより、
 懐中の竹ながし二本、もちてありしを、いだしつかは

名義・和主・天正・黒本・易林
 にけなわ：なは「竹繩」名「竹を細く割り、よりあわせたなわ。火繩などに用いた。・日葡辞書「Aguanau（タケナワ）」
 発音 ㄱㄴ

る」・談義本・養漢標百貫「三・大路小路を夜々の忍び
按摩剣術は神影柔術は竹(タケ)の内(ウチ)の一流」
・歌舞伎・四天王櫓・三立「柔術は何流トかかる。
『子供も知った竹(タケ)の内(ウチ)さ』」**発音** 櫓(ノ)

人也。今日「竹内流腰廻」といふ。・仇討三態「菊池寛」：「俺はな、子供の時から、竹内流の居合が自慢でなあ！」

②江戸時代の眼科の一流派。竹内是斎の創始したもの。〔発音〕タケノウチリユー 〔論〕①

をのまそうに母のおねがひ物に時ならぬしにかりしをもちとるに、雪空の中にふり、事さらにになりしに、諸天是を憐み給ひ、雪の中に竹の子三本をだつた。
・俳諧・犬子集・三・若竹・あつさにやぬく竹の子のかみは生え」
② 縫ひ直しの古着で、以前の縫込みの部分の生地、きじた色がさめいで、目だつて見えるもの。
③ たけのこいしや〔筍医者〕の略。
④ (根)がつながっているところから、共同で物事を其のことをいふ、盗人仲間、隠語。〔隠語構成様式并其語集〕
⑤ たけのこせいしかつ〔筍生活〕の略。・婦郷大仏次郎「花」とうして、食つてをるのだ。・各等
たけのこのちや、でも、一軒の家の中には、幾けん又何かし在るもんだてなと
各流、箭の所有をめぐめる畑主とやぶの持主の争ひを、仲裁人がいろいろとりなし、結局、相撲をとつて畑主の勝ちになる。「狂言記では、竹子守。〔角〕①②③
たけのこて 損さへをしたよう (筍でひとよくしけしようとしたが、損をしたしまったので、よくしめて戴をにらんでいるというしやれから) やぶにらみの人をあざけていうことば。筍の番をするよう。
たけのこの 親(お)やまさり (筍は、生長がめざましく、たちまち親竹と同じほどの高さになるところから、子がおの親よりすぐれていくことのため、さばる親にまさる。・俳諧・玉吹草二「たけの子おやまさり」・浄瑠璃・絶待剣本地四「竹の子は猶おやまさり、薨が産だる鷹の羽、羽がひの下に立返り」・浄瑠璃・国性爺後日合戦・嫁入り三・戯・国性爺が手柄始は千里が竹、其の竹の子の親まさりたけのこの皮(かわ) 〔たけのかわ(竹皮)〕に同じ。・和玉篇「慈タケノコノカハ」・和漢三才図会八五「獐たけのかは 音託笋皮八太介乃古乃加波」・思出の記念館富蘆庵一・二、さしももの大身代も何時か筍の皮剥く様に瘦せて来た」〔和玉〕
たけのこの 育つよう (筍は生長がめざましいところから、育ちの早いこと、ぐんぐん伸びていくことのため、え、筍のようだ。・謠矩〔筍タケノコ〕のそたつやう
たけのこの 番はんをするよう (たけのこ〔筍〕で損をしたように同じ。・評判記「難波物語」處なみあしく、目もと、何とやらん、竹の子の番をするやうなり。・仮名草子・曾呂利狂歌咄三「目元は竹の子の番はん」をするやうに見えて) たけのこの ようだ (たけのこ〔筍〕の育つようと同じ。・雑俳・柳多留拾遺卷二「竹の子のやうたと

あをとおして居」

たけのこは親おや「親竹(おやだけ)」にまさる

たけのこ(こ)の親まさりに同じ。狂言・呪い男

「箭は親竹にまさる」。噺・喰尽し三笋(タケノコ)は親おやに増まさる」

たけのこあそい。たけのこあそひ【竹子争・笋争】もたけのこ(二)筍

たけのこいし【「箭医者」(名)「箭は敵に至らないところから」へたな医者を敵医者というが、それにも至らない、技術がへたで未熟な若い医者。たけのこ(三)筍】

「筍園・竹園」余③

たけのこが、い【「筍見」(名)①タケノコガイ科の巻貝目。紀伊半島以南の暖海に分布し、水深一〇と三〇センチメートルに棲む。細長い円錐形で殻長約五・五センチ。螺層は約二〇階。殻は堅く、淡黄色の地に黒褐色の方形紋が並び美しい。形が筍に似ているのでこの名がある。貝細工の材料にする。貝品識名タケノコガイ】

②タケノコガイ科に属する巻貝目の総称。タケノコガイ、リュウキュウタケ、ベニタケなど日本周辺に約二〇種産し、熱帯地方に多い。

「筍園・タケノコガイ・竹園」

たけのこがさ【「筍笠」(名)「たけのかわがさ(竹皮笠)」に同じ。宗長手記下「おなじはたに庵を結び、床に箕竹に笠をかけ、わらうたをしきて」。親説・誹諧落帛帳冬雪会「燕弁は竹の笠笠のはたれ雪親重」。和漢三才圖會「二六笠タケノコガサ」略・按笠笠竹、笠笠タケノコガサ也。歌舞伎・雪隠付我難序幕「向の目の傘を担ぎ」。思出の記・徳富蘆花「四六」竹の笠笠は古びて穴が明き緒緒も當て無いとは云ても、猶まだ雪を凌ぐいささかの便りにはなりそなた」

「筍園・タケノコガサ・竹園」

たけのこがた【「筍形」(名)「筍のように、先端が鋭く、全体が短い」か。また、そのもの。酒落本・仕懸文庫「わきざしはぐつと短く、竹のこがたといふやう」

「筍園・タケノコガサ・竹園」

たけのこがたな【「筍刀」(名)「たこうながたな(筍刀)」に同じ

たけのこぎり【「竹鋸」(名)「竹で鋸のこぎり」の形につくたもの。江戸時代、主殺しなどの重罪人に対する刑罰である。江戸時代のこぎりびきに用いた刑具。・時・慶應記・文禄二年二月四日「親二人土に掘入首を出して、首を七日に竹のこぎりにて被引と也。・浄・瑠璃・夏・泉浪花鑑「一寸切たら一尺の竹鋸ノ二枚ゴリで挽(ひ)き返す」。歌舞伎・染井蝶・桔梗ノ二枚ゴリ捨てる戯は小栗柄の。竹鋸タケノコギリ」の身の罪科」

「筍園・タケノコギリ・竹園」

たけのこぎりひき【「竹鋸挽」(名)「竹鋸で罪人の首をひくこと」ひき。その刑。たけのこびき。

たけのこしだい【「箭時代」(名)「箭生活で毎日を暮ら

す時、特に第二次世界大戦直後の窮乏生活の時をもい。・自由作家 獅子文六 自由を求めて「駒子」も、その価値を知って、あのタケノコ時代にも、これだけは、手離さなかつた品物である。〔閑園會之〕

② たけのこしよ 〔竹御所〕 京都市右京区嵯峨北堀町にある単立宗教法の尼寺、曼華院の別称。延宝年間（一六七三—一八）後西天皇の皇女大成尼が入住し、中興してかへ呼ばれた。〔閑園會之〕

たけのこじる 〔笥竹〕 名。筍に若布わかめをとりあわせ、木の芽などをあしらひつたすまし汁。・言継卿記 元龜二年五月二十九日、正親町竹子汁可振舞之由有之。〔閑園會之〕

たけのこすし 〔筍鮓〕 名。鮓の一種。筍の押鮓か。・雜俳 俳諧狂言「よい加減、竹子鮓の一夜漬」〔閑園會之〕

たけのこせい かつ・セイタツ 〔筍生生活〕 名。筍の皮を一枚ずつ剥くうちに、家計困難のために衣類やその他の持物を少しずつ売って生活費とし、ようやく食いつたてである。特に、第二次世界大戦直後の窮乏生活の状態をいう。たけのこ。・掃部大仏次郎 過去、竹子生生活のことを、彼はまだ切實には知らない。〔閑園タケノコセイカツ會之〕

たけのこ短刀 〔筍短刀〕 名。（形が筍に似ているところから）短刀、先が刃のほうにうつむきみになったもの。鎌倉時代の作に多く見られる。〔閑園會之〕

たけのこつゆ 〔筍梅雨〕 名。筍の出る頃に吹く東南の風、伊勢伊豆地方の船乗りのことば。〔季夏〕

・物類称呼一四 風か吹、略す 三四月東南の風吹をなたねつと云、四月吹東南の風を、たけのこつゆといふ。八月に吹風を野分といふ。・俳言集 筍つゆ 風の名、余部菜種つゆの条に詳也。

たけのこすし 〔筍時〕 名。筍がさかんに出る頃。たけのこの出盛。特に、俳諧、菊句後拾遺「新夜やす時たけのことききの草の庵」〔閑園會之〕

たけのこながし 〔筍流〕 名。陰曆四五月頃に吹く南風。〔季夏〕

・俳言集 筍流（タケノコナカシ）四月の南風を云。

たけのこぬすど 〔竊盗人〕 名。〔閑園〕 斜視。やぶにらみ。能本異八代部 338（たけのこ佐渡崎）

たけのこは 〔筍生名〕 〔閑園〕 つどり（簡鳥）。高知 030（たけのこつ）富山 030

たけのこひびき 〔竹簾挽〕 名。たけのこぎりびき竹手挽に同じ。・黒潮徳富蘆花「一一・四草ならみ鏡」に同じ。・黒潮タケノコひきにしても猶足らぬ所に候。〔閑園會之〕

たけのこぶきょう 〔フギヤウ〕 〔筍奉行〕 名。〔筍〕の番をたけのこにむかひむかひやらから。やぶにらみをいふ。・休可笑記 四竹（タケ）の子奉行ヲフキヤウといふ目は戯にらみの事じゃけに。・雜俳 万人

ふ心あるを知りて而して大に怒りに語噴々タケヒ
(熱田洞) 時に道臣命案に賊害をこなはむとい
ふ。コヒ別調なりて曰く

たけひきやゆめじ [竹久夢二] 画家 詩人 岡山県出
身 本名 茂次郎。感傷的な詩文・挿絵をかき、その美
大いに流行した。代表作「女十題」長崎十三景。明
治一七〇昭和九年(一八八四—一九三四)

たけひし [竹菱] 戦場用いる具、敵の襲撃に備
えてまき散らす鉄菱(てつし)になつて、竹を割
つてしらえた菱の実形をしたもの。播州佐用軍
記上四・熊見川渡にて寄手を防之事草の袋に入
て持たる鉄菱「竹菱ヒシ」を詠詩たりける

たけひしは [竹久夢二] 植物のひしは、誰日(芝)
の異名。重訂本草綱目啓蒙「二・陳草 猶略馬唐
たけひしは」は、薩州・たけひしは 石州
たけひしはなわ 二ひは [竹火燭] 二(たけひしなわと)
火燭の一種。竹の皮の纖維になつて火燭とした
もの。・日御辞書「Agehinata タケヒナワ」・俳諧
七拍集雪中庵用行「客走て鉄砲かつ竹火燭、薩
摩」・望月の江戸をひたすら「夢蘭」・歌舞伎 忠臣蔵
形容両合「簡は持たねど道草に、火打がはりの竹火燭
(タケヒナワ)」 〔関園會之四〕

たけひしやあら [名] 万箇にさのような竹の細枝、熊本
県下益城郡矢部郷(たけふへえ)宮崎県東諸県郡
摩佐 佐々

たけひしやうたん 二ベタン [竹風簾] 二名 竹につけた
風簾・浄瑠璃 金酒双紋巴中三尺四方に切破り、
内を覗ふ竹風簾、がらつかすれと寐入るはな
たけふ [竹生] 二名 二たふ竹生に同じ。・書記
安閑元年閏二月(寛文版左訓「仍て上の御野みふ
の」)の御野上の桑原下の桑原(はな)に竹生(タ
ケフ別調)たかふの地下ところを奉獻り
たけふ [竹節] 二名 明春で、連続した二子(に)が一
間隔でて平行に並んでいる形。確実な連絡形として
よく用いられる。竹節の形に似ていることからこ
ろの名がついた。二丁継ぎ。竹のふし。

たけふ 武生 福井県中部の地名。日野川の中流域に
ある。古代、越前国の国府が置かれた地で、江戸時代
は福井藩支藩。本多氏の城下町。在来の生物、蛟蟻
の近代工業が行なわれる。昭和三年(一九四〇)市
制。・催馬楽道の口「道みち」の口 太介不(タケフ
の国府)に、我はありと・潮氏・浮世木たけふの
こうに、うつろひ給ふとも、忍びては参り来なをを
たけふ 一建 猛 造 二自 一上 二 三 一 たけだけい ふる
ま 入る。また、雄々しくふるまう。・古事記上 伊
都八千。音は、雄々しくふるまう。・多郎
夫(タケケト云ふ)踏み建びて。・万葉九二八(〇)

九叫びおらび土をふみ牙咬(き)ぎみ五匹怒たけ
びて山鹿(やましか)歌集・万葉一・二・三四・健甕(けんわ)
すらをのおもひ乱れて隠せるその妻天地(あめつち)とはり
てるとも願(ねが)へやも八・云大夫(いんたふ)ますらをを思ひ多
道備(みちのへ)タケビて▽へ麻呂(まろ)歌集

たけぶき 〔竹笛〕名 篠竹で作った横笛。篠笛。篠笛・鉄
幹子(てつこ)与調野鉄幹(てつこ)等晩秋の歌くれゆく秋のさびしさ
にその竹笛(たけぶき)タケブエに吹けよかし 〔関園遺稿〕

たけぶきえいり 〔竹笛〕名 歌舞伎下座音楽の一つ
三味線(さんまゐ)律に竹笛の音を含ませたもの。篠入り。
・歌舞伎名歌徳一(なかつ)玉(たま)四立(よたて)此文句の切に下座
へとり、摺鉦(すりかね)竹ふへ入りの浮いたる鳴物に成り
・劇場調業園(てあき)集二(しゆ)竹笛入の合方八腹切場にあり▽

〔関園遺稿〕

ただぶき 〔岳落〕名 植物はんかいそう(吟喚草)の
異名・日本植物名彙合(しゆごく)松村任三(しんざ)「タケブキ キヤ
ウリウリサウ ハンクウチウ」望江南

たけふばこ 〔竹文箱〕名 手紙を入れるための竹筒
・日葡辞書(Babelhaab)タケフバコ

たけぶん 〔武文〕能楽の曲名。京文(きやうぶん)たけぶ
んは一院御所(ごしよ)を守護して京から土佐(とさ)へ下向した武
途尼(ぶとに)で松浦所(まつら)にがしに御息所(ごしよ)を奪われた武
文は切腹し、のち怨霊(おんりやう)となって松浦を殺す。座曲。幸
若舞曲(さわぶき)新曲と同村。

たけぶんがに 〔武文〕名 へいけがに〔平家簀〕
の異名・本朝食譜一〇「簀略(しりやく)亦効(またた)武文簀、賊武
文簀者(しやく)簀也・和漢三才図会(わかんさんさいずゐ)四六「鬼衆(きしゆ)タケフンカ
ニしまらかに」俗云(ひやく)武文簀、其小者(そのせう)名島村簀
略(りやく)元弘之乱(げんこうのらん)秦武文(しんぶぶん)はたのたけぶん死す(し)摂州(せつしゆ)兵
庫(こ)海(かい)族(しゆ)兵庫(へいこ)及播州(はりゅう)明石浦(あかしう)之鬼衆(きしゆ)俗呼(ひやく)曰(い)武文簀」

〔関園タケケンガニ二論之図〕 〔関園遺稿〕

たけべーあやたり 〔建部綾足〕 江戸中期の学者。
読本作者。俳人、画人、俳句、涼装、画号、葉葉齋
江戸で生まれ、弘前で育つが兄嫁との不義により
二四歳後家郷を出奔、諸国に居住した。国学の
面では筑後真淵(まへ)に師し、片歌の提唱者として著
名だが、読本の先駆的作品本朝水滸伝(みづかへん)「西山物
語」を著わすなど多方面に活躍した。享保四一安
永三(一七九一七九四)

たけべーかたり 〔建部賢弘〕 江戸中期の数学者。江
戸の人。通称彦次郎(ひこじら)は不休。関孝和の弟子。
孝和兄の賢明と共に当時の数学を大成して日本
成算科にまとめ、また、将軍吉原(よしか)に召されて「日本
図作に当った。また、算学啓蒙(さんしやくきほう)を著して、幕府
算経(さんけい)。寛文四一(元文四年二六六四一七三九)
たけべーそうちう 〔建部果才〕 江戸中期の俳人、画号
は秋香庵(あきか)黄雀(わうさく)など。俳語を春秋庵(しゆく)白雄(はくしゆ)に、画を谷
文晁(やう)に学んだ。閑屋(かんや)の里に隠栖、閑屋の果才と呼

[illegible]

作 第〈武家義理物語〉

笠の竹骨・土長髪を仰(おき)さへる時に、白い手拭を被ったなど有。三竹竹タケベラの意から夕日が、牛の眼珠に映てゐた」〔**閑園繪之**⑩〕

たけぼり「竹法螺」名。竹を切つて管くどとて、吹き鳴らすもの。簡篳(つつが)。歌舞伎・藤川船橋語四立所ににて早拍子木、竹法螺タケボラ、かすめてドドンになる。歌舞伎敵討噺吉市正直清兵衛一幕庄屋様で何か御用があると見て竹法螺(タケボラ)を吹かけやつたこと。〔**閑園繪之**⑪〕

たけぼり「竹」窃取行為、または窃盗品をいう、盗人仲間間の隠語。〔**隠語撰輯・特殊語百科辞典**〕

たけまき「竹末」「竹」の格のついた意。また、前に竹を植えてある窓、ちくそう。「浮世草子本朝二十不孝四・「天目に竹窓(タケマド)生あれば食ひ」と有と腹ふくるに外の願ひもなし」。談義本風流志軒伝「独ひとり」竹窓(タケマド)のもとに、日ごと硯にむかいて」。桑の実鈴木三重吉「二二女髮結の看板のかかつてある家の竹窓には」〔**閑園繪之**⑫〕

たけまわり「は」(岳回・嶽回)[名]高山に初雪が降つて白くなること。随筆北越雪譜初上「天氣驟變たる事数日にして遠近の高山に白を点じて雪を靨國山端處成・遠近の高い山が白くなる。これを嶽廻(タケマヅリ)といふ」。

たけみ「たけ」勇猛をふるうこと。あはれること。将門記承徳三年点いよりよ跋題の猛(タケミ)を成して、悉く合戦の方(みち)を搦ぶ」。

たけみかずちのかみ(なみ)みつ。「[建雷雷神武樂礎神]日本神話諸男神。天照大神の命を受けて出雲に降り、事代主神、建御名祖神を服従させ、大國主命に國譲りをさせた大神。神武東征のとき、靈剣を天皇に献上したとされる。」〔**閑園繪之**⑬〕

たけみくらじんじん「武水別神社」長野県東埴田市八幡にある神社。旧景社。祭神は武水別神・誉田別命・郡千早赤飯村にある神社。旧府社。祭神は天御中主命・天彦命・岡安女命(みずのはねのみこと)、国水女神・崇神天皇の頃の創立と伝えられる。建武年間(一一三四—一二三〇)補正成が再建。〔**閑園繪之**⑭〕

たけみくら「三短」形動。か普通のものより短いさま。「浮世草子武道經總の柳(二二)もとより武太

夫は古文真宝の男、こもんのぬのこたけみちかかわづかの太刀づくり・めぐりあひひ二葉亭四迷記一「丈短タケミシ」な草の下から半ば顔を出してゐる銀葉に指さしをて見えた。〔園圃〕
たけみそ「竹味」名。竹の中にある粉。漢方薬として用いる。白・黒褐色などがあるが、牙色（薄黄色）でかすかに透明なものが特によい。●重訂本草綱目啓蒙三三「苞木」天竹黄。たけみそ。略。天竹黄は竹中にある粉なり。〔園圃〕

たけみつ「竹光」名。〔古来刀工の名に吉光・国光・兼光など〕光の字が多いところから造語。①刀身を竹で光つて作り、刀のようにみせかけたもの。武家の下僕、折衝などが刀代わりに腰に差していた。たけがたな。たけべら。●雑俳・西国舟「かるいぞや、申竹光・大流口侍也。内証不立言也。竹光刀の侍也。此外外無縁官人。御隨身。内舎人。弁侍。小納言侍」●酒落本「卯地泉意目録」竹光（タケミツ）の高慢は納めはのなくだけ頼さぞ。●咄本・無事志有章竹光「こたへかねてひりとねば竹光（タケミツ）」

②切れ味の鈍い刀をあざけていう語。なまくら。●咄本・鯛の味噌津土左衛門「家にたつふる竹光（ミツ）の一腰やう。をきさきみあるしが」●歌舞伎・傾奇者（タケミツ）で切れるものか。③尺八の異称。●雑俳・柳多留二「竹光のけいこ」としてねろ。〔園圃〕

たけみなたとみのみこひがみわけじんじや
【健御名方富命彦神別神社】長野市城山にある神社。旧景社。祭神は健御名方富命彦神別命。上古、現在の善光寺の所に創立。持統天皇五年（六九二）諏訪大社とともに勧祭が行なわれたが、のち衰へ、善光寺に吸収されて年神堂として存続。明治二年（一八七九）現在地に再興。水内大社。〔園圃〕タケミナタミノミコトヒコガミワケジンジヤ

たけみなたのかみ（建御名方神）日本神話の男神。大國主命の子。天照大神の使いの建御雷神の命に服さず力大ををしたが負け、信濃国長野県諏訪湖まで逃れ、同地に鎮まったという。〔園圃〕
たけむきがき「竹向がき」南北朝時代の日記。二巻。竹向（日野名子）作。貞和五年（一三三九）成立。元弘の變前後から成立年まで二部欠脱の動亂日記の伝統の体験を回想して記した。王朝女流日記の伝統の最後を飾る作品で、史料価値も高い。〔園圃〕タケムキガキ

たけむし「竹筴」名。竹で編んだむし。浴室や夏用の敷物などとして用いたもの。たかむし。●浮世草子「色里三所帯上・三・あがり場に竹筴（タケムシ）敷て猫の枕をなす」。〔園圃〕
たけむすび「竹結」名。儀式用の包み物にかける水

引の結び方の一種。〔園圃〕

たけむら「竹藪」名。竹の林。竹やぶ。たかむら。●俳諧・類集「安竹村に芥に入るは笋（たけのこ）はやう・生出る」とん。●名張少女入田山花巻九「隣の山の吹、其向ふに、繁り合へる竹藪」。〔園圃〕
たけむら「竹村」江戸新吉原遊郭の江戸町二丁目にあつた菓子司、竹村伊勢大塚（万屋伊勢衛）の店。明和・安永（一七六四・一七八一）頃、最中もなかの月・巻煎餅（まきせんべい）が名物となつた。竹村伊勢。●談義本・根無草「後・三・最中の月は竹村に仕出す」。●酒落本・通言総論「二・い中の町の夕景色、左の竹村に比して、右側の七けん軒をならぶ」。●酒落本・傾城質談客物語「一・竹村が、こつちへよこさつせ」。〔園圃〕

たけむら「竹村・武村」姓氏の一つ。〔園圃〕
たけむらいせ「竹村伊勢」（伊勢）は「伊勢大塚」の略。〔たけむら「竹村」に同じ。●酒落本・郭中名物論「古来より竹村伊勢が所に年久しき我をさしおき望中（もなか）の月がすすきたる言ふん」。●随筆・守貞漫稿「二・古原名物。略。一、巻せんべい。中のうくわしや・竹村伊勢」

たけめし「耳飯」名。マツタケなどをたきこんだ飯。たけめし。●明和・時貞漱石二九「頃大好きな耳飯（タケメシ）も、手を取付けないで」。〔園圃〕
たけもが「竹虎落」名。竹を荒くすじに編んで組み合わせた垣根。竹矢来たけやらい。●続春夏秋冬・河東碧梧桐「冬・水柱すや垣根の竹虎落へ八重枝」。〔園圃〕

たけもと「竹本」名。たけもとよりゅう（竹本流）に同じ。●竹豊故事上「竹本・豊竹の流義は、時に合ひし浄よりと云つべし」。●東京新繁昌記「服部誠一初・字校「楊花をんなだゆう」の寄（よ）せに、竹本の阿駒と清元の阿花とを聞いて」。〔園圃〕
たけもとと「竹本・武本」〇姓氏の一つ。〇〇（竹本）

たけもととおおすみだゆう「竹本大隅太夫」義太夫節の太夫。三世。本名井上重吉。大阪出身。初名春子太夫。明治二（一八八四）大隅太夫を襲名。彦六座で三味線の名人団平と組んで活躍した。摂津大塚ととも明治期の代表的太夫。安政元（一八四二）（一八五四）（一九一三）

たけもとと「竹本・義太夫」浄瑠璃の太夫。義太夫節の祖。本名五郎兵衛。摂津国（大阪府）の人。はじめ清水理兵衛につつま播磨節を学ぶ。延宝五年（一六七七）京都の宇治座で嘉太夫（加賀掾）のワキを語って好評を得た。貞享二年（一六八五）頃大坂道頓堀に竹本座の櫓をのぞき、竹本義太夫を名乗る。義太夫の新浄瑠璃は人気を得て、義太夫の地位も確立した。元禄一（一六九四）（一七〇一）竹本筑後少掾を受領。慶安四（一七二四）（一七二五）

一七二四
たけもとと「しじだゆう」〔竹本越路太夫〕義太夫節の太夫。三世。大正期の代表的太夫。大阪出身。二世の門弟。明治三（一八七〇）三（一八七二）を襲名。慶応元（一八七五）（一八八五）（一九二四）
たけもとと「せつだいじう」〔竹本摂津大塚〕義太夫節の太夫。大阪出身。五世竹本春太夫の指導をうけ、明治期を代表する名伶となつた。明治三（一八七〇）三（一八七二）摂津大塚受領。大正二年（一九一三）引退。天保七（一八三六）（一八三九）（一九一七）
たけもとと「そめたゆう」〔竹本染太夫〕義太夫節の太夫。〇〇初世。大坂の人。宝暦期の義太夫節中興の祖。〔伝法屋敷〕の一流を残した名伶。天明五（一七八五）没。〇六世。嘉永四年（一八五二）六世襲名。幕末に活躍した。自叙伝「染太夫日記」を残す。寛政一〇（一七九八）明治二年（一七九八）一八六九）
たけもとと「たけふ」〔竹本津太夫〕義太夫節の太夫。〇二世。京都の人。元治元年（一八六四）二世を襲名。しづい芸で人気を博した。明治四三年（一九一〇）引退。天保一〇（一八三九）（一八三九）（一九一〇）
たけもとと「たけふ」〔竹本長門太夫〕義太夫節の太夫。〇三世。二世の弟子。明治四二年襲名。豪快な芸風で昭和初期の代表的太夫となつた。明治二（一八七〇）一六（一八九四）
たけもとと「たけふ」〔竹本長門太夫〕義太夫節の太夫。〇三世。浄瑠璃中興の祖。大坂の人。四世染太夫の門で、文政六（一八二三）三世を襲名。三味線の名人団平をはじめ、後進の指導をよくした。寛政二（一七九〇）元治元年（一八〇一）一六四四）
たけもとと「たけふ」〔竹本春太夫〕義太夫節の太夫。五世。堺の人。四世春太夫の義子。大隅太夫（一八四三）五世を襲名。天性の美声で明治初期の第一人者。摂津大塚や三世大隅太夫を育てた。文化五（一八二九）（一八八七）
たけもとと「たけふ」〔竹本政太夫〕義太夫節の太夫。〇初世。〇竹本播磨少掾。〇二世。大坂の人。通称薩摩屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）

〇二世。大坂の人。通称播磨屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新町西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）

〇二世。大坂の人。通称播磨屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新町西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）

〇二世。大坂の人。通称播磨屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新町西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）

〇二世。大坂の人。通称播磨屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新町西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）

〇二世。大坂の人。通称播磨屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新町西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）

〇二世。大坂の人。通称播磨屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新町西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）

〇二世。大坂の人。通称播磨屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新町西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）

〇二世。大坂の人。通称播磨屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新町西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）

〇二世。大坂の人。通称播磨屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新町西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）

〇二世。大坂の人。通称播磨屋重兵衛。初代の門弟、その養子となる。寛保三年（一七四三）新町西口に初出陣。師に生き写して小政と呼ばれ、新町西口に住んだところから西口、また薩摩屋（さかもと）の出身であるところから薩摩屋と呼ばれた名伶。宝永七（一七三〇）（一七三〇）（一七三〇）